図 1
赤く塗られたコードロン・シムーンの
復元機（ポントワーズ飛行場の作業場で）

特集　赤い翼：パリ―東京プロジェクト

時代と国境を越える大空へのロマン

「赤い翼：パリ―東京」実行委員会　会長　鈴木 真二

1936 年、若きフランス人パイロット、アンドレ・ジャピーは、フランス製コードロン・シムーン機に乗り、パリ―東京間を 100 時間以内で飛行するという壮大な懸賞飛行に挑戦しました。11 月 15 日深夜、ジャピー機はパリ郊外のル・ブルジェ空港を飛び立ち、南回りで幾度かの給油を経て、19 日朝には香港を発ち、3,000 km 先の東京を目指しました。しかし、悪天候に行く手を阻まれ、目的地を東京から福岡県雁ノ巣飛行場へと変更せざるを得なくなり、佐賀県の脊振山中で不運にも遭難するという悲劇に見舞われました。

絶望的な状況の中、ジャピーは脊振村（現在の神埼市）の人々による懸命な捜索によって奇跡的に救出され、福岡市の九州大学附属病院での治療を経て、無事に帰国の途につきました。

往年の名機「空の貴婦人」を復元、佐賀―東京飛行に挑戦

本プロジェクトは、このアンドレ・ジャピーの挑戦飛行を、コードロン・シムーン機の復元と佐賀―東京間の飛行によって現代に蘇らせようとするものです。2014 年以降、日仏両国で始動したこの壮大な試みは、時代と国境を越え、私たちに大空への限りないロマンと、不屈の精神を伝えてくれます。

プロジェクトは、まるで精緻なジグソーパズルのようです。その中心となるのは、往年の名機、コードロン・シムーン機の復元です（**図 1**）。第一次世界大戦において世界の頂点を極めたフランス航空機は、その後、ドイツやイギリスにその地位を譲り、フランス政府は 1928 年に航空省を設置し、再起を図りました。ジャピーが挑戦したパリ―東京飛行も、航空省が企画した 1 等 30 万フラン、総額 55 万フランの懸賞飛行でした。

ルノーの航空機エンジンを搭載したコードロン・シムーンは、「空の貴婦人」と称えられ、数々の冒険飛行で活躍しました。サン＝テグジュペリが不時着した機体としても知られるこの名機は、現存するのはル・ブルジェ博物館に「星の王子さま」の人形とともに展示されている機体と、本プロジェクトで復元が進められている機体のわずか 2 機のみとなっています。復元の経緯については、コードロン・シムーン復元協会会長ステファン・ランテールへのインタビュー記事で詳しく語られています（**図 2**）。

ジャピーの夢、実現に向けて日仏のネットワーク

そして、もう一つの重要なピースは、アンドレ・ジャピーその人です（**図 3**）。フランスの名家に生

図2　筆者とステファン・ランテールの両会長は赤い翼プロジェクトの基本合意書に調印、握手をかわした
（2024年7月、航空自衛隊百里基地での赤い翼展で）

まれたアンドレが空を志した背景については、親族のニコラ・ジャピー（アンドレはニコラの大叔父）が寄稿してくれました（**図4**）。復元協会とニコラの出会いは、まさに必然と言うべきものでしょう。アンドレが果たせなかった東京への飛行を実現したいというニコラの熱い想いが、復元協会の新たな目標となりました。

このニコラの想いを引き出したのは、日本における様々な出来事でした。その一つが、プロジェクトの日本側実行委員会副会長である青木裕子（軽井沢朗読館館長）による朗読劇「アンドレの翼」です。青木がNHKアナウンサー時代に偶然隣人であったジャピー家の木村ジェニーからアンドレ・ジャピーの挑戦を聞いたことが、この朗読劇を生むきっかけとなりました。2013年と2014年に日仏で上演されたこの朗読劇のスポンサーとなった笹川日仏財団の理事であった渡辺昌俊（実行委員会事務局長）もまた、重要なピースです。

渡辺は、職務上ニコラと偶然にも繋がりがあり、2014年のニコラ一行の神埼市訪問を実現させました。神埼市では、アンドレ・ジャピーの救出を伝える活動が続けられており、児童文学者・権藤千秋の『飛べ！赤い翼』出版などを契機にジャピー家の故郷であるボークール市と姉妹都市提携を結ぶなど、特別な交流がありました。神埼市の人々の温かい歓迎を受けたニコラが、佐賀－東京間の飛行を目指すことを明らかにしたのは、この訪問がきっかけであり、フランスでのプロジェクト発足へと繋がったのです。

今年はフランスでテスト飛行、来年につなぐ期待

この壮大なプロジェクトは、語りつくせないほど多くのピースによって彩られています。アンドレが帰国前に東京の朝日新聞社を訪れ、1937年

図3　コードロン・シムーンとアンドレ・ジャピー

に東京－ロンドン間を飛行した「神風」号のパイロットに南回り経路の情報を提供したエピソードもその一つです。また、日本とフランスの航空分野における当時の交流も、重要なピースです。1919年にフォール中佐を団長とするフランス航空教育団が来日し、日本の航空界に大きな影響を与えたことは、当時のフランスが世界の航空を牽引していた何よりの証でしょう。筆者は、実行委員会副会長のクリスチャン・ポラック（日仏交流史研究家／株式会社セリク代表取締役社長）らと共に、教育団来日百周年記念事業としてその活動を検証し、日仏で記念イベントを開催しました。この活動が、日本での実行委員会の核となり、日仏航空交流に理解のある多くの支援者により支えられています。

COVID-19の影響による遅延を経て、復元作業は着実に進み、2025年にはフランスでの飛行試験が予定されています。順調に進めば、2026年には日本へのお披露目も視野に入ってきました。世代と地域を超えた大空へのロマンの実現に向け、皆様の温かいご支援を賜りたいと存じます。
（敬称略）

図4　国土交通省で記者会見する復元協会のニコラ・ジャピー副会長（中央）、左はジャン＝ピエール・シェレ事務局長
（2023年4月）